新刊 日本學研究叢書

日本學研究叢書 23

311 福島核電廠事故、迫使臺日兩國的能源政策面臨重新檢討。事故後、日本政府將「核能定位爲重要的基載電源」、並推動核電再運轉。但在臺灣、因福島事故激勵了民間的反核運動、遂使 2016 年 5 月就任的民進黨蔡英文總統、宣佈決定 2025 年達成「非核家園」的政策。

「福島事故後台日エネルギー政策の変換と原子力協力(日)」
謝牧謙・石門環 編

311福島原発事故は、日台両国のエネルギー政策の抜本的な見直しを迫られた。事故後、日本政府は「原発を重要なベースロード電源」と位置付け、原発再稼働を進めた。台湾では、福島事故により、原子力反対の世論が高まり、2016年5月総統に就任した民進党の蔡英文氏は、2025年までには「ゼロ原発」の方針を決定した。

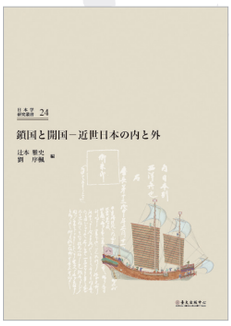
本叢書收錄福島事故前後、臺日兩國能源政策轉變過程有關的論文和臺日核能交流的實績以及論述兩國今後核能合作方向的文章共 16 篇。其中主要論文爲 2014 年、本中心在臺北舉辦「第 31 回中日工程技術研討会」的「能源政策人文産業組」中發表的論文及 2015 年、日本『Energy Review 誌「台日核能安全合作」專集』中刊載的文章。

日本與臺灣同爲缺乏能源的國家、地緣政治上兩國亦屬生命共同體、但是福島事故後、臺灣與日本相反、走向「非核家園」。究其原因爲 (1) 國民對核能安全的疑慮高漲和 (2) 迎合大衆的民粹政治上、由兩國文化的差異性而引起。但今後 (1) 核廢料處置 (2) 核電廠除役及 (3) 民衆共識的建立等是兩國共通的問題、在此領域兩國應相互深入理解、並互相合作。本叢書的出版寄望有助於今後臺日兩國在能源領域的合作。✦

本書は福島事故前後、日台両国のエネルギー状況とエネルギー政策を巡る変遷経緯に関する論文および日台原子力交流の実績、更に今後両国の原子力協力のあり方について論述した文章を16編収めたものである。その主な論文は2014年、台北で開催された「第31回中日工程技術研討会」の「エネルギー政策人文産業組」で発表されたものと2015年、『エネルギーレビュー誌「日台の原子力安全協力」特集』に掲載されたものである。

日本と台湾は同じくエネルギー資源に乏しく、地政学的にも両国は一蓮托生の関係にある、しかしながら福島事故後、台湾は日本とは逆に「脱原発」に走る。その背景には(1)原子力発電に対する国民の不安の高まりと(2)ポピュリズム政治等に両国文化の差異性に起因する。但し、今後(1)放射性廃棄物処分(2)原発廃炉措置(3)国民のコンセンサスなどについては両国共通の問題であり、この分野において相互理解を深め、お互いに協力すべきである。本書が今後エネルギー分野の日台協力に役立てれば幸いである。✦

日本學研究叢書 24



「鎖国と開国－近世日本の内と外－」
辻本雅史・劉序楓 編

「鎖國」體制是日本近世在「內」、「外」夾縫中所選擇的對外政策。本書是圍繞「鎖國」、「開國」問題，在台灣聚集日本、韓國、荷蘭專家於一堂，相互討論而彙整的論文集，也就是現代研究者之「內」與「外」交叉議論的成果。超越以往僅以日本近世史研究之一環的討論，本書不限於東亞，更擴及歐洲、環太平洋等，在全球化的世界史動向中，對日本近世選擇的「鎖國」體制及其變化過程，提出宏觀及多樣的論點。

要問「鎖國」究竟要討論些什麼？在本書第一部中，首先整理了與各時期課題相關的「鎖國」研究史，明確提示出此問題的意義。第二部「鎖國的內與外」，則由外部世界投射出「鎖國」的意義。第三部由各種不同視角，討論圍繞「鎖國」、「開國」在思想上的爭論和內外文化的衝突、交涉等問題。透過上述研究可清楚看出，有關「鎖國」、「開國」的討論，也是足以列入東亞近代史射程內開展的重要議題之一。✦

「鎖国」体制は、日本近世の「内」と「外」のはざまで選択された対外政策である。本書は、「鎖国」「開国」をめぐって、台湾の地で、日本、韓国、オランダの専門家たちをまじえて交わした議論をまとめた論文集である。つまり現代の研究者たちの「内」と「外」が交差した議論の成果である。これまでの日本近世史研究の一環としての議論を越えて、東アジアはもとより、ヨーロッパ、太平洋など地球世界の世界史的動向のなかで、日本近世が選択した「鎖国」体制とその変容過程を、全体としてとらえる視点と論点が、多様に提示されている。

〈「鎖国」を問うことは何を問うことか〉、その時々の課題と連関した「鎖国」研究史はその「問い」の意味を浮き彫りにする（第一部）。第二部「鎖国の内と外」は、外部世界から「鎖国」の意味が照射され、第三部で「鎖国」「開国」をめぐる思想的議論と内外の文化の葛藤や交渉の多様な諸相が俎上にのる。それを通して、「鎖国」「開国」をめぐる議論が、東アジア近代史も射程に入れた議論に展開していく必然性が明らか見えてくる。

本書は、日本近世史研究が、もはや一国史にも日本近世史にも回収できないことを、明確に提起した書である。✦

新刊 日本學研究叢書

日本學研究叢書 25

本書主要蒐集、窺探日治時代的日人作家西川滿在台灣的文學活動與創作軌跡。藉由系統化的資料整理與文獻探討，作者不僅自台灣文學史的視角，描繪了西川滿接受台灣文化及文學影響的歷程，也善用西川滿之一手資料，強調其創作與台灣這塊土地之間的密切聯繫，對於台日文學關係研究具有一定的學術貢獻。✦

「西川滿研究－台湾文学史の視座から－」
陳藻香 編

本書は、今まで日本文学史書に全く見出すことのできなかった日本領台時代台湾における文学活動の記録を、散乱した資料の中から蒐集し、整理し、系統化させ、その時代における日本文学活動の輪郭を描きだしました。その中で、風雲を叱咤する寵児のごとく出現し、未だ十分に灌漑されていない土壌に文芸の花を咲かせ、論議を招いた西川満という作家の真の姿を明らかにしました。✦

日本學研究叢書一覧（1-22）		
1	国際日本学研究の基層―台日相互理解の思索と実践に向けて―	徐興慶、太田登 編
2	国際日本学研究の最前線に向けて―流行・ことば・物語の力―	林立萍 編
3	日本近現代文学に内在する他者としての「中国」	范淑文 主編
4	日本中世文学における儒釈道典籍の受容 ―『沙石集』と『徒然草』―	曹景惠 著
5	東アジア龍船競漕の研究―台湾・長崎・沖縄の比較―	黄麗雲 著
6	現代日本語造語の諸相	林慧君 著
7	転換中の EU と「東アジア共同体」―台湾から世界を考える―	徐興慶、陳永峰 主編
8	近代東アジアのアポリア	徐興慶 編
9	朱子学と近世・近代の東アジア	井上克人、黄俊傑、陶德民 主編
10	明治日本における台湾像の形成―新聞メディアによる 1874 年「台湾事件」の表象―	陳萱 著
11	日本昔話語彙の研究	林立萍 著
12	非断定的表現「(し) そうだ」に関する語用論的考察	黄鈺涵 著
13	詩に興り礼に立つ―中井竹山における『詩経』学と礼学思想の研究 ―	田世民 著
14	台湾法における日本的要素	王泰升 著
15	石川啄木詩歌研究への射程	林水福、太田登 編
16	台湾に生まれ育つ台日国際児のバイリンガリズム	服部美貴 著
17	自由・平等・植民地性―台湾における植民地教育制度の形成―	山本和行 著
18	帝国日本の教育総力戦―植民地の「国民学校」制度と初等義務教育政策の研究―	林琪禎 著
19	日本統治期台湾における訳者及び「翻訳」活動―植民地統治と言語文化の錯綜関係―	楊承淑 編
20	東アジア情勢の転換とアベノミクスの影響	蘇顯揚、魏聰哲 編
21	思想史から東アジアを考える	辻本雅史、徐興慶 編
22	東アジアにおけるトランスナショナルな文化の伝播・交流―メディアを中心に―	梁蘊嫻 編

＊在日本欲購買本叢書請洽紀伊國屋書店。
本叢書は日本の紀伊国屋書店でお買い求めいただけます。